2026年度 第7回（12月）北辰テスト対策 予想問題　解答・解説

国語

1　問1（4点）

ア

遥は、受験勉強の疲れや焦りから、弟の何気ない一言に強い言い方をしてしまった。「自分でも思いがけないほど」とあるので、そう言ってしまった自分の言葉に、遥自身が驚いている。

・ア 弟への強い言い方に、自分でも驚いている→正答

・イ 弟の態度に本気で腹を立て、しつけようとしている様子は本文にない（湊は「責めるつもりのない、ただの感想」を言っただけ）

・ウ 責任を押しつけようとしているとは書かれていない

・エ 弟に嫌われたいと思っている様子は本文にない

採点ポイント: 「自分でも思いがけないほど」から、遥が自分の言葉に驚いていることを読み取れているか。

1　問2（4点）

ア

湊は、姉のきつい言葉に言い返さず、焦げの苦味に顔をしかめながらも食べ、そのうえで「おいしいよ。」と言っている。姉を責める気持ちはなく、むしろ姉を気づかっている。

・ア 姉を気づかい、苦さをこらえて食べている→正答

・イ 仕返しのつもりという様子は本文にない（「おいしいよ」と言っている）

・ウ 食欲をなくしたとは書かれていない（食べ続けている）

・エ 「叱られるのがこわい」「あきらめた」とは書かれていない

採点ポイント: 「顔をしかめながら、それでも『おいしいよ。』」という動作とことばから、湊の気づかいを読み取れているか。

1　問3（6点）

(例) 無理をせず、湊の気づかいに応えて、二人で家事を分け合おうと思った（32字）

正答例:

・(例1) 無理をせず、湊の気づかいに応えて、二人で家事を分け合おうと思った（32字）

・(例2) 無理をして抱えこまず、湊の気づかいに応え、二人で家事を分けようと思った（35字）

根拠: 母のメモに「無理は、しないで」とあり、湊も「お姉ちゃんが毎日作ってくれるの、ぼく、ちゃんとわかってるよ」と、遥を気づかっている。遥は、「ひとりで全部やらなければと思いこんでいたのは、自分のほうだったのかもしれない」と気づき、湊といっしょに作ることで、負担を分け合おうとした。

採点基準:

要素	配点内訳	判定基準
①「無理」が使えている	1点	指定語必須
②「気づかい」（形を変えてよい）が使えている	1点	指定語必須
③ 無理をしてひとりで抱えこむのをやめるという内容が示されている	1点	「無理をせず」等
④ 湊の気づかいに応え、二人で（家事を）分け合うという内容が示されている	2点	「二人で分け合おう」等
⑤ 25〜35字の字数を守っている	1点	逸脱は減点

指定語の使用順序は問わない。

1　問4（4点）

ア

直前に湊が「ぼくが洗う。お姉ちゃんは、勉強してきなよ」とやさしく申し出ており、③のあとで遥は「さっきは、ごめん。湊は何も悪くないのに」と、やっと声を出している。黙って水の音を聞いていたのは、弟のやさしさにふれて、八つ当たりした自分を恥じ、あやまる言葉を探していたからである。

・ア 弟のやさしさにふれ、あやまる言葉を探している→正答
・イ 母に電話すべきか迷っている様子は本文にない
・ウ 弟の言葉を信じられないとは書かれていない（すぐに自分からあやまっている）
・エ 洗い物にうんざりしている様子は本文にない

採点ポイント: 前の湊の申し出と、後の遥のあやまる言葉を、「黙って聞いていた」でつなげて読めているか。

1　問5（5点）

ア

冒頭では、焦がしたことがきっかけで遥はいらだち、とげのある言葉を口にした。結びでは、焦げの跡が残っていても「いやだとは思わなかった」と書かれている。完璧にこなさなければと自分を追いつめていた遥の気持ちが、和らいだことが印象づけられる。

・ア 完璧を求めて追いつめられていた気持ちが和らいだことを印象づけている→正答
・イ 洗い物が終わらないことを暗示する描写ではない（「洗いおえた」とある）
・ウ 湊の料理の腕前の話ではない
・エ 冒頭と同じ気持ちのままではなく、焦げに対する気持ちが変化している

採点ポイント: 冒頭の「焦げ」への反応と、結びの「いやだとは思わなかった」を対比して読めているか。

1　問6（5点）

ウ・オ

・ア: 「鍋の底から、焦げたにおいが立ちのぼった。」と、においの描写で場面の様子を伝えている→適切
・イ: 「おいしいよ。」ということばに、苦いのをこらえて姉を気づかう湊の思いがこめられている→適切
・ウ: 本文は遥の視点で語られ、遥の考えや気持ちが直接書かれている。湊の視点から遥の気持ちが推測されているわけではない→不適切→正答
・エ: 母は場面に登場せず、冷蔵庫のメモを通して母の思いが伝えられている→適切
・オ: 結びまで夕食の日の夜の出来事で、翌朝には移っていない。時間の経過が示されているわけではない→不適切→正答

採点ポイント: ウ・オの2つを両方選んで正答（5点）。過不足があれば0点（部分点なし）。

2　問1(1)（2点）

ごうがん

傲岸＝おごりたかぶって、人を見下すようす。

採点ポイント: 「ごうがん」。「おうがん」「ごうげん」などの誤りに注意。

2　問1(2)（2点）

きざ

「刻む」は「きざむ」と読む。意味は、細かく切る、きざみ目をつける、時間を少しずつ進める、など。

採点ポイント: 送りがな「む」は——部に含まれないので、「きざ」と書く。音読みの「こく」は不正解。

2　問1(3)（2点）

催

催す＝会や行事を開く。
採点ポイント: 送りがなの「す」は問題文にあるので、「催」だけを書く。「にんべん」に「崔」。「摧」などと書き誤らないこと。

2　問1(4)（2点）

再燃

再燃＝おさまっていたことが、ふたたび問題になること。
採点ポイント:「燃」を「然」と書き誤らないこと。「再」の最初の一画も確かめる。

2　問2（3点）

イ

連体詞は活用せず、体言（名詞）だけを修飾する自立語。
・ア 穏やかな＝「穏やかだ」と言い切れる形容動詞
・イ いわゆる＝活用せず、体言「天才」を修飾する連体詞→正答
・ウ 美しい＝言い切りが「い」で終わる形容詞
・エ ずっと＝用言「歩いた」を修飾する副詞
採点ポイント: 活用するかどうか、何を修飾しているかの二点から見分けられているか。

2　問3（3点）

イ

文節は、「ネ」を入れて自然に読める最小の単位。「兄は／毎朝／公園で／犬と／散歩を／する。」と区切れるので、6つ。
・ア 5つ→「散歩を」「する」を分けていない
・イ 6つ→正答
・ウ 7つ→区切りすぎ
・エ 8つ→区切りすぎ
採点ポイント:「ネ」を入れて区切り、助詞は前の語とひとまとまりにできているか。

2　問4（3点）

イ

もとの文の「妹の作った」は、「妹が作った」と言いかえられる。この「の」は、主語を示す働きをしている。
・ア 私の＝あとの体言「かばん」を修飾する連体修飾語
・イ 雨の降る日＝「雨が降る日」と言いかえられる主語→正答
・ウ 姉の＝「姉のもの」の意味で、体言の代用
・エ 行くの行かないのと＝同じような事がらを並べる並立
採点ポイント:「が」に言いかえられるかどうかで、主語を示す「の」を見分けられているか。

2　問5（3点）

ウ

単語に区切ると、「弟／は／新しい／靴／を／買っ／て／もらっ／た」の9つ。

・弟（名詞）・は（助詞）・新しい（形容詞）・靴（名詞）・を（助詞）・買っ（動詞「買う」）・て（助詞）・もらっ（動詞「もらう」）・た（助動詞）

・ウ 9つ→正答

採点ポイント: 「買っ」「もらっ」は活用する語の一部で、「て」「た」は別の単語として数えられているか。

2　問6（3点）

ア

遠い目標も、まず目の前の小さな一歩から始めれば、やがて近づけるという意味のことわざは「千里の道も一歩から」。

・ア 千里の道も一歩から＝遠い道のりも、最初の一歩から始まる→正答

・イ 石の上にも三年＝つらくても辛抱強く続ければ、いつか成功する

・ウ 急がば回れ＝急ぐときは、危険な近道より、遠回りでも確実な道を選んだほうが結局は早い

・エ 猿も木から落ちる＝その道の名人でも、時には失敗する

採点ポイント: 場面の「遠い目標」「まず〜から始めた」の二点と、ことわざの意味を結びつけられているか。

2　問7（3点）

ア

本末転倒＝大切なこと（本）と、そうでないこと（末）を取り違えること。健康のためのダイエットで体調をくずすのは、目的と手段が逆になっている。

・ア 本末転倒→正答

・イ 一石二鳥＝一つの行いで二つの利益を得ること

・ウ 自画自賛＝自分で自分をほめること

・エ 以心伝心＝言葉にしなくても、心が通じ合うこと

採点ポイント: 「健康のため」という目的と「体調をくずす」という結果が食い違っていることから判断できているか。

2　問8（2点）

ウ

司会は、森さんの「見にくくならないか」という心配を受けとめ、石井さんの案を生かしたまま改善する方向へ話をつなげようとしている。空欄のあとの「表紙は各学年から三冊ずつにしぼって」へ自然につながるのはウ。

・ウ 見やすさの面から、案を整理する必要を述べている→正答

・ア 森さんは「いい案ですが」と述べており、反対ではない

・イ 本の数は、森さんの意見の中心であり、関係がないとは言えない

・エ 石井さんの案を取り上げないのは、あとの発言とつながらない

採点ポイント: 空欄の前後の流れから、司会の役割（意見をつなぐ）を読み取れているか。

3　問1（4点）

ア

第1段落の終わりに、かつては紙の地図を広げ、方角を確かめ、目印を探しながら歩いたとある。①は、その手間をかけなくても目的地に着けるようになった、ということ。

・ア 方角や目印を確かめながら道を調べる手間をかけなくても着ける→正答

・イ 位置関係を正確に覚えられるようになったとは述べていない（第2段落では、むしろ覚えていないと述べている）

・ウ 紙の地図が禁じられたとは述べていない

・エ 目的地までの距離が短くなったとは述べていない

採点ポイント: 「苦労」の中身を、直後の「かつては……」の一文から読み取れているか。

3　問2（4点）

ア

第2段落に、紙の地図で歩く場合は「頭の中で道すじを組み立てなければならない」とある。これが「道を考える」仕事にあたる。

・ア 方角を確かめ、頭の中で道すじを組み立てること→正答

・イ 天気や服装の話は本文にない

・ウ 電車の料金を調べることは本文にない

・エ 町の店の名前をすべて覚えることは本文にない

採点ポイント: ②の次の文の「頭の中で道すじを組み立てなければならない」を根拠にできているか。

3　問3（6点）

(例) 自分で道すじを組み立てる中で、周囲の景色や町の位置関係が頭に残る（32字）

正答例:

・(例1) 自分で道すじを組み立てる中で、周囲の景色や町の位置関係が頭に残る（32字）

・(例2) 道すじを自分で考えて歩くので、景色や町の位置関係が自然に頭に残る（32字）

根拠: 第2段落に、紙の地図で歩く場合は「頭の中で道すじを組み立てなければならない。その過程で、周囲の景色や、町全体の位置関係が、自然に頭に残っていく」とある。自分で道すじを考える過程が、町の記憶につながる。

採点基準:

要素	配点内訳	判定基準
①「道すじ」が使えている	1点	指定語必須
②「位置関係」が使えている	1点	指定語必須
③ 自分で道すじを組み立てる（考える）という内容が示されている	2点	「自分で道すじを組み立てる中で」等
④ 景色や位置関係が頭に残るという内容が示されている	1点	「頭に残る」等
⑤ 25〜35字の字数を守っている	1点	逸脱は減点

指定語の使用順序は問わない。

3　問4（4点）

ア

④は、技術が自分の何を代わりにやってくれているかを意識して使う、という考え。直後に、急ぐときはアプリに任せ、ゆとりのあるときは紙の地図を使うという「使い分け」の例が示されている。

・ア 計算の手間を電卓に任せていると意識し、時間のあるときは筆算で確かめる→正答
・イ 技術を使うのを「いっさいやめる」のは、本文の考え（手放せと言いたいのではない）と反する
・ウ 任せきりにして確かめないのは、意識して使うことにならない
・エ 使い方を教えることは、「何を肩代わりしているか」の意識とは関係がない

採点ポイント: 「意識して使う」と「使い分け」の二点を、別の例に置きかえて考えられているか。

3　問5（5点）

ウ

「適切でないもの」を選ぶ問題。

・ア: 冒頭で身近な地図アプリの例を挙げ、読者を話題に引き入れている→適切
・イ: 「たとえば」で、二人が歩く場面を想定し、主張を具体的に示している→適切
・ウ: 本文に、地図アプリの開発者への取材や仕組みの説明は出てこない→不適切→正答
・エ: 「だからといって」で、直前の内容から予想される誤解を打ち消している→適切

採点ポイント: 「本文にあること」と「本文にないこと」を区別できているか。

3　問6（5点）

ア

筆者は、地図アプリが便利な反面、道を考える仕事を技術に任せることになると述べ、そのうえで、手放していることを意識して場面に応じて使い分けることを勧め、最終段落で「便利さを受け取るときほど、手放しているものに目を向ける」とまとめている。

・ア 手放しているものを意識して、使い分けることが大切→正答
・イ 「使うのをやめて紙の地図に戻すべき」とは述べていない（「手放せと言いたいのではない」）
・ウ 「新しい技術を早く使い始めるべき」とは述べていない
・エ 方向感覚が生まれつきで決まるとは述べていない

採点ポイント: 具体例と、最終段落の主張の両方を含む選択肢を選べているか。

4　問1（4点）

イ

昔の時刻は、十二支を使って表した。一日を十二に分け、「子」が午前0時ごろ、そこから二時間ごとに、丑（午前2時ごろ）、寅（午前4時ごろ）、卯（午前6時ごろ）と進む。

・ア 午前0時ごろ＝子の刻
・イ 午前2時ごろ＝丑の刻→正答
・ウ 午前4時ごろ＝寅の刻
・エ 午後2時ごろ＝未の刻

採点ポイント: 子から丑へ、二時間ごとに進む順を知っているか。本文の「寅の刻、東の空、ようやく白みければ」からも、夜明け前の時刻だとわかる。

4　問2（4点）

ア

「べからず」は、「〜してはならない」という禁止を表す。大将は、合図があるまでは、勝手に先を争ってはならないと命じている。実際に、兵どもが「命に従ひ、息を殺して待ちけり」とある。

・ア 勝手に先を争ってはならない→正答
・イ 「できない」は不可能の意味で、命令の場面に合わない
・ウ 「つもりである」は意志で、「べからず」の意味ではない
・エ 「はずである」は推量で、「べからず」の意味ではない

採点ポイント: 「べからず」＝禁止（〜してはならない）と覚えているか。

4　問3（4点）

ア

第3段落に、夜明けに大将が法螺貝を吹かせて「一度に攻め入りぬ」、城の兵どもは「油断して眠りゐたれば、あわて騒ぎて」とある。油断して眠っていたところに、いっせいに攻め込まれたため、あわてて門を開いた。

・ア 油断して眠っていたところを、いっせいに攻められてあわてたから→正答
・イ 味方の援軍が来たと思いこんだとは書かれていない
・ウ 食料が尽きていたとは書かれていない
・エ 敵が引き上げたと思ったとは書かれていない

採点ポイント: 「油断して眠りゐたれば」（注）と「一度に攻め入りぬ」を結びつけて読めているか。

4　問4（4点）

(例) 兵たち全員が心をひとつにして戦った（17字）

正答例:

・(例1) 兵たち全員が心をひとつにして戦った（17字）
・(例2) 兵たちが心を合わせて、力を尽くしてくれた（20字）

根拠: ④のあとに「兵ども、心をひとつにしたればこそ」とある。「〜ばこそ」は、「〜だからこそ（勝てた）」と理由を強めて言う言い方。大将は、自分一人の力ではなく、兵たちが心をひとつにしたからだと考えている。

採点基準:

要素	配点内訳	判定基準
① 兵（みんな・全員）が主体である内容	1点	「兵たち全員が」等
② 心をひとつにする（心を合わせる）という内容	2点	「心をひとつにして」等
③ 10〜20字の字数を守っている	1点	逸脱は減点